

過疎だって 売りにする。 六次化農業の パイオニア



九州の最南端・大隅半島に「農福連携」の先駆者がいると聞いて、訪ねてみた。

社会福祉法人白鳩会の理事長・中村隆重さんが、

「農福連携」という言葉が出てくるずっと前から、四〇年にわたって行ってきたのは

「障害者と、農業で食べていく」という強い思いから生まれる、必死でがむしゃらな取り組みだった。

職員も障害者も
見分けがつかない

鹿児島市内から鹿児島湾をぐるっと回りこみ、車で二時間ほど南下していく。大隅半島の南端に、南大隅町がある。この地で四〇年前から障害者と共に農業を続けているのが、社会福祉法人白鳩会だ。

訪れた日の夕方、農場を見せてもらった。ちょうどにんじくの植え付けをしているところだった。午後四時ごろ、夕日の中で一〇名ほどが作業している。誰が職員で、誰が障害者なのか、よくわからない。単に見た目の印象というのではない。作業の様子をしばらく見ていても、誰かが誰かに指示を出している様子がなく、立場の違いがうまくつかみ取れなかったためだ。どなたかお話を、と声をかけると、

主任の加藤浩司さんが顔を上げ、作業を止めて、こちらにやってきた。

職員と障害者と、区別がつかませんね、と伝えると、「そうかもしれない。うちの場合、農場に出たらみんないっしょですから」と笑いながら「たとえば、ほら」と、畑の端で耕運機を使っている二人を指さした。「彼らは二人とも障害者です。機械だって、使えるなら障害があるかないかは関係なく、誰でも使えます」。安全に使えることが確認できるまでは、職員がいっしょに作業するが、できる人はどんどん機械の使い方を覚えて、自ら使いこなしていくという。

にんじくの生産は、昨年（二〇一三年）からはじめた。二・八町歩ほど試しにつくってみて、課題もあったが、今年は三倍以上の一五町歩に拡大する。「プレッシャーも大きいですけど、やり

編集部＝文
text by Kotonone
岸本 剛＝写真
photograph by Tsuyoshi Kishimoto

がいもあります」。大学では工学を学んだという加藤さん。一度は一般企業に就職したものの、違和感を覚え、白鳩会に転職した。農業は未経験だが、障害者といっしょになって働くことによるこびを見出しているという。

東京の運送会社から 鹿児島県の障害者施設へ

白鳩会の設立は、一九七三年。理事長の中村隆重さんに、経緯を聞いた。「元をさかのばれば、私が東京でトラックの助手をやっていたところからはじまります」。南大隅町生まれの中村さん、東京の大学から一流企業への就職を目指したものの、かなわず、叔父の経営する運送会社就職することになった。「そのまま信じたわけではないですが、将来的には会社を任せるとも言われ、それも魅力でした」。ところが一年たつても、社長どころか、トラックの助手のまま。事務職にも回してもらえない。「景気がよくて仕事がいっぱいじゃなくなっている。現場は猫の手も借りたいくらい。事務所に人を置くらないなら現場に、ということだったんで

しょう」。これではいつまでたつても会社経営なんてできない。そう思つて南大隅町に戻った。「親父からは、やってた保育園を継ぐという話があったんですが、それではおもしろくない。何をやるうか、と思いついたのが障害者施設でした。というのも、弟が躁鬱病（現在で言う双極性障害）だったんです。定職を持つことができずに、苦労していた弟を、なんとかしてやりたいと思ったんです」。

自分は医者ではない。弟の症状を和らげることはできない。それでも何かできないか。そう考えて「いっしょに働ける場所づくり」をしようと、白鳩会を立ち上げた。

ここには 農業しかなかった

白鳩会は当初、生活訓練や作業訓練をして、三年後に社会に出てもらうことを目標に活動していた。しかしそれでは、障害者を救うことにはならないと、中村さんはすぐに壁にぶち当たった。「支援や指導によつて、障害者の社会的能力を高めるこ



みんながいっしょになって 「稼ぐ農業」をやる

とには限界がある。このやり方では、障害者が社会に出て自立生活を送る支援にはつながらない」。自ら仕事をつくり、仕事を通じて、障害者が自立生活に必要な収入を自分で得るのだったら、難しい。

しかし、そのために何をすればいいのか。南大隅町でできることを、と考えたら、農業しかなかった。「しかし、それを『逃げ』と捉えるのではなく、前向きに、これで食っていける、食っていくための手段として捉えると可能性が広がる、そう思いました」。

療育目的や、あるいは中村さんの言葉を借りれば「ままごと」ではない農業、つまり、働いて生活のための収入を稼ぐための農業をしなければ。そう考えたなら、自然と「企業的な農業」という考え方に至ったという。「企業的な農業とは、農業を通じて障害者を教える、指導するのではなく、組織全体が農業で収益を上げるといことです。どう稼ぐか、必死

的な関係はなくなる。それぞれができることをし、できないことがあれば、できる人が補ったり、教えたりする。チームで生産性を上げなければ、全員が「食っていく」ことはできない。

障害者も職員も、共に「食っていく」ための農業。冒頭、にんにくづくりの現場で見た、誰が職員で誰が障害者かわからない感覚、教えるとか教えられるという関係ではなく、それぞれが独自に自分のできる作業をしている雰囲気は、中村さんの考え方が反映された結果なのだ。

障害者を「搾取」すると 言われ続けた

いまでこそ「農福連携」という言葉が浸透し、農業で収益を上げる障害者施設に注目が集まるようになったが、中村さんが白鳩会を立ち上げた、農業をはじめた四〇年前には、そんな空気はなかった。「私たちは障害者を使って儲けようとしていると見られていました。搾取する人間だ」と。療育としての農業はあっても、それで収益を上げ、障害者が食べていく

ための農業という考え方はなかった。

行政も、厳しい目で白鳩会を見る。「いろいろな場面で、行政指導の対象になりました。監査の度に指摘を受けていましたね」。なぜ障害者に、それだけ過酷な労働をさせるのか。障害者は、利益追求の犠牲者ではないのか。中村さんは、毎年のように行政とぶつかり合った。十数年の間、戦い続けた。すると次第に社会の方が変わってきて、中村さんの考え方が受け入れ、それを「よし」とする価値観が生まれてきた。福祉に対する考え方が変わってきた。「障害者も、自らの努力によつて、自立できるし、そうするべきだ、という考え方が、ここ数年で大きくなってきました。私たちの活動も、全国から注目していただくようになりました」。

自由な経営のため 農事組合法人をつくった

農業をはじめてすぐに、農事組合法人を立ち上げたのも、「農業で食っていく」ための工夫だ。「農業で収益を上げるには、資本が必要で

す。土地しかり、設備しかり。資本がなければ経営できない。ところが、社会福祉法人は、農業経営にとっては制限が多すぎるのです」。土地の取得、先行投資のための借り入れ、助成金の申請。農業をやるための制度整備がない社会福祉法人では、大規模な農業経営はできない。農事組合法人の枠組みを使って、農業に必要な資本、すなわち土地と設備を四〇年間にわたってこつこつと築き上げていった。その結果、いまでは東京ドーム約一〇倍、「日本の障害者施設でもトップクラスでしょう」と中村さんが誇る広大な農地、製茶工場、一三〇頭の母豚から毎年二〇〇〇頭の豚を生産する養豚場など、福祉の枠組みでは考えられない規模の土地・設備を持つにいった。

販路を開拓し 市場の動きをつかむ

これらの「資本」を、白鳩会では柔軟かつスピーディーな経営に活用している。その一例が、市場ニーズに合わせた新しい作物への取り組みだ。

取材二日目、トマトのハウスを見せてもらった。とにかく規模の大きさに圧倒される。大きなハウスがずらりと並んださまは、まるで工場を見ていくかのよう。ここでは高糖度のトマトをつくらうと、肥料や水やりを試行錯誤している。



冒頭で紹介したにんにくも、トマトも、白鳩会が取り組みを強化している作物だ。ほかにも、落花生、タマネギなどにも、近年力を入れている。その背景には、これまで白鳩会が主力としてきたお茶の市場が大きく変化してきたことにある。

「現状、年間売上のおよそ半分を占めているお茶ですが、近年、市場価格の下落が課題になっています」。白鳩会の販売促進部長・横峯浩文さんは言う。「もともとゆるやかな右肩下がりでしたが、昨年（二〇一三年）、大幅に下落。お茶に代わる作物の開発は急務です」。

そこで注目したのが、トマトとにんにく。高い糖度のトマトも、品質の高いにんにくも、いま、市場のニーズが高く、高い単価で売れる商品だ。

福祉施設では珍しい、営業担当である横峯さんは、鹿児島県内を中心にスーパー・小売店を回って販路を開拓すると同時に、バイヤーなどから情報を収集し、市場の動きを見極め、生産の現場と連携しながら、常にニーズにあった商品を提供し続ける役目も負う。そうすることで、安定した収益を得ることができる。

「六次化」で、 価格決定権を取り戻す

白鳩会の販路に対する考え方に先駆性がある。それはやはり、こ

まで何回か繰り返してきた「食っていくため」という視点から生まれたものだ。

「つくったものをそのまま納めるのではなく、小売側に価格決定権を握られ、買い叩かれてしまう。直接消費者とつながるためにはつくったものを加工し、商品化すること、自分たちで売る工夫が必要」との考えから、自前の製茶工場を持ち、栽培した茶葉は加工し自分たちの銘柄で販売。養豚場の豚は、と畜の後、自分たちで枝肉から精肉し、ハムやソーセージをつくって売っている。またレストランやアンテナショップなどをつくって販路を広げており、たとえば農場でとれた野菜などを使ってつくったジェラートは、鹿児島市内のショップ「花の木冷菓堂」で販売するなどしている。いわゆる「六次産業化」に、もう二〇年も前から取り組んでいるのが、白鳩会なのだ。「もののなかつた時代はともかく、いまは外国からもどんどん入ってくる。ものの価格は叩かれる運命にある。六次産業化によって、自分で販路をつくることで、私たちの製品の良さをわかってもらえる客層

をつかむことが、今後ますます必要になってきていると感じます」（中村さん）。

福祉と農業と観光で、 南大隅にしかできないことを

いま、中村さんは、農業と福祉に「観光」を絡めた展開を模索している。「過疎化の課題を抱える南大隅町ですが、裏を返せば、そこに『秘境』があるということ」。白鳩会で最大規模を誇る農場「花の木農場」のすぐ裏には、「雄川の滝」という名瀑がある。また車で一時間ちよつとで行くことができる、九州最南端の「佐多岬」は、近年県が観光開発に乗り出した。「観光農園的な展開などを考えています。土地の魅力に人の魅力をプラスして、外から人呼び込みたい」。「農業しかない」から「農業がある」への発想の転換。四〇年前、南大隅町で、障害者と共に生きることを決意した中村さんの思いは、いままた大きく広がろうとしている。



経営の発想が

障害者の能力を引き出す

濱田健司

（JA共済総合研究所 主任研究員）



白鳩会は、早くから「農福連携」そして「農福商工連携」に取り組んで来た社会福祉法人です。学びの多い、これからの福祉をけん引し、地域を支える法人です。

農場では知的障害者が、刃物を動力で稼働させる草刈り機、さらには乗用のトラクターや茶収穫機を当たり前のように操作しています。また障害者は職員といっしょに、土日や深夜も農作業をし、残業もします。

一般的に知的障害者は反復動作を得意とし、自らの判断を必要とする作業などは得意でないと認識されています。しかし、白鳩会はそのが私達の一方的な思い込みであることを教えてくれます。障害者は覚えるま

でに時間はかかりますが、一定の判断を必要とする作業もできます。そして農産物の生育状況に合わせ、自主的に、または求めに応じ、臨機応変に作業できるのです。

白鳩会は知的障害者の有する潜在能力に注目し、それを引き出し、障害者の就労訓練・就労、そして法人の運営に繋げてきました。

障害者福祉施設が、地域の耕作放棄地の担い手となり、食料を安定供給し、障害者だけでなく多くの健康者の雇用機会を創出してきたのです。障害者福祉施設はいま、地域に役立っ、そして必要となる存在になっていることが求められています。